

年 度	番 号	部 門
17		森林保護



福井県総合グリーンセンター
林 業 試 験 部
Tel 0776-67-0002

“福井の森の研究から”

ナラ類集団枯損面積の推移

カシノナガキクイムシ（写真－１参照）によるナラ類の集団枯損（写真－２参照）が平成５年度から特に目立ち始め、平成１６年度末現在では三国町を除く全ての市町村に被害が発生した。

そこで、この被害面積の統計数値から、その推移を分析したので、その結果を紹介する。

１．調査の方法

被害面積の推移は、県産材活用課の資料により年度毎に嶺北と嶺南地域に分けて検討した。なお、調査期間は、被害面積の統計を取り始めた平成５年度から１６年度末とした。さらに、文献上（伊藤ほか、１９９８）から福井県における過去の発生事例も調べた。

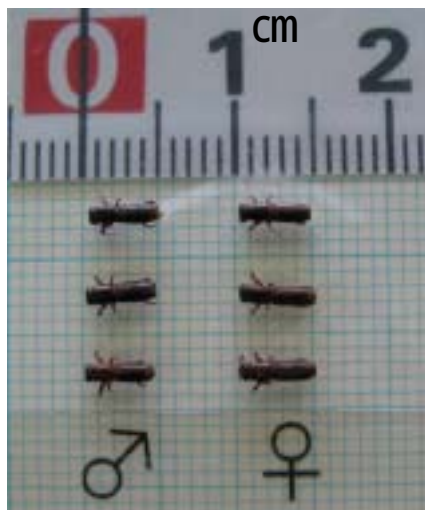
２．調査の結果

福井県における過去のナラ類集団枯損発生事例を調べると、最初の被害記録は、昭和３９年に敦賀市でコナラ（４０～５０年生）５００本に被害があったと記されている。その後、昭和５６年に再度敦賀市で被害が発生している。なお、昭和５５・５７年に敦賀市と隣接する滋賀県北部で被害が発生していることから、この県境付近が一帯的に被害を受けたと推察された。さらに、昭和６３年から平成元年には敦賀市から丹南地区にかけて被害が確認されている。

これら発生箇所の事例を見ると、いずれも１～２年で被害が終息していたが、平成５年頃からは継続的に被害が発生して現在に至り、過去に類を見ない甚大な被害となっている。

次に、平成５年度からの嶺南地域における実被害面積を見ると、平成５年度は４．８haであったが、１年後には３４．０haとなり、わずか１年間で２９．２ha増加していた。さらに、平成７年度の被害面積は１４８．０haとなり、前年度より１１４．０ha増加していた。この平成７年度を境に被害面積は激減し、その後は低位のまま推移している。

一方、嶺北地域の実被害面積を見ると、被害がほぼ微害であった平成１０年度までは１０ha以下で推移していたが、この年度を境に平成１１年度は３９．５haで３０．０ha増加し、さらに、その翌年度は１７０．５haとなり、前年度より１３１．０ha増加していた。その後３年間は漸減傾向を示していたが、平成１６年度には激減し４４．９haとなっている（図－１参照）。



写真－１ カシノナガキクイムシ



写真－２ ナラ類集団枯損被害地

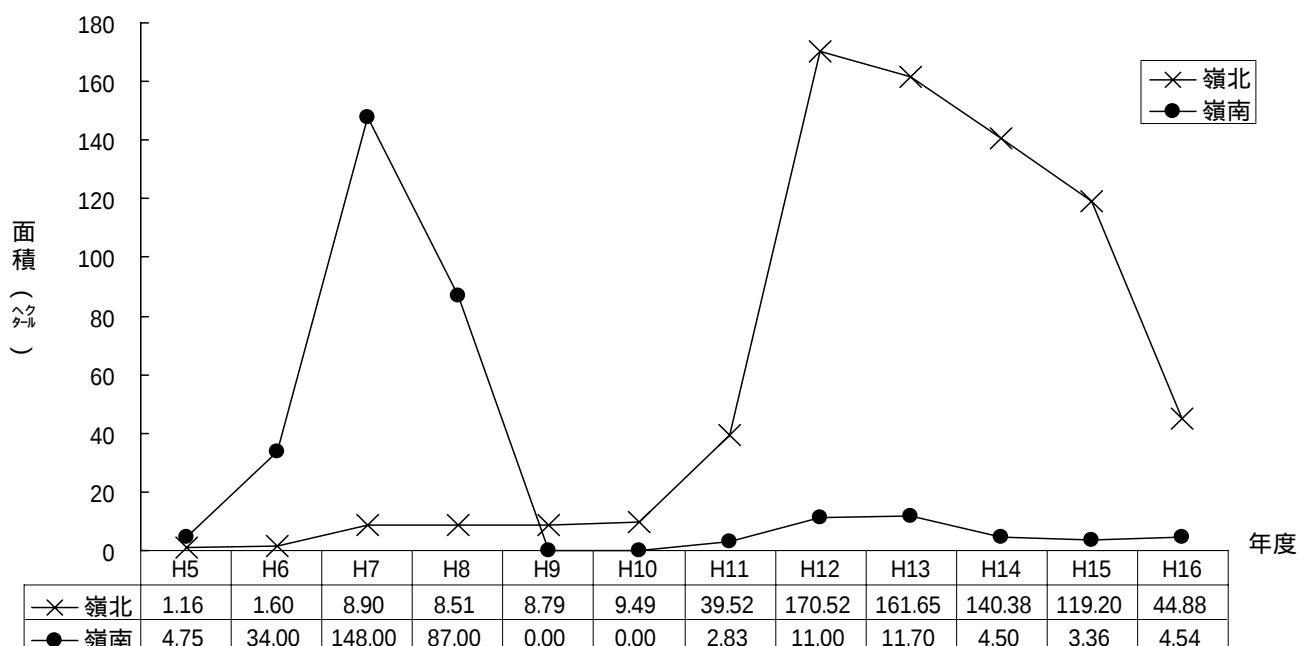


図 - 1 カシノナガキイムシによるナラ類集団枯損実被害面積の推移

3. おわりに

今回の調査結果から、被害面積の推移を見ると、被害が拡大を始めてから3年目でピークを迎え、5～10年目で終息する傾向があることが判明した。これらの傾向は、嶺北・嶺南地域とも同じであったことも判明した。また、嶺北地域の被害面積は、嶺南地域で被害が終息した翌年度より拡大していることから、カシノナガキイムシが嶺南地域から嶺北地域へ北上したと考えられる。

ところで、ナラ枯れはカシノナガキイムシによる多量の穿孔被害を受け、さらに、樹体内でこの虫の繁殖が成功した場合に起こるとされている。したがって、穿孔被害が少量の場合、または、繁殖に失敗した場合は枯死を免れることになる。しかし、過去の敦賀市で被害が再発している例から、枯死を免れた個体がある程度大きくなった場合、再度被害を受ける恐れがある。このため、今後の被害の動向に注意が必要である。

参考文献

- 1) 伊藤進一郎・山田利博(1998). ナラ類集団枯損被害の分布と拡大. 日林誌 80(3). 229 - 232.